市制10周年を迎え、青年都市福生はまた一段とたくましく成長しました。
目標人口６万5,000人をめざし、市民とともに考え、市民とともに歩む首都近郊の中堅都市として着実に前進しています。

若い都市、若い市民。

市民の約60％が戦後生まれ

日本全国で、戦後生まれの若者たちはざっと数えて6,000万人。総人口１億1,500万人の過半数をしめ、いまや社会の担い手はこの戦後生まれの若者たちに移行しつつあります。もちろん、市も例外でなく、人口４万8,600人のうち約60％が戦後生まれです。

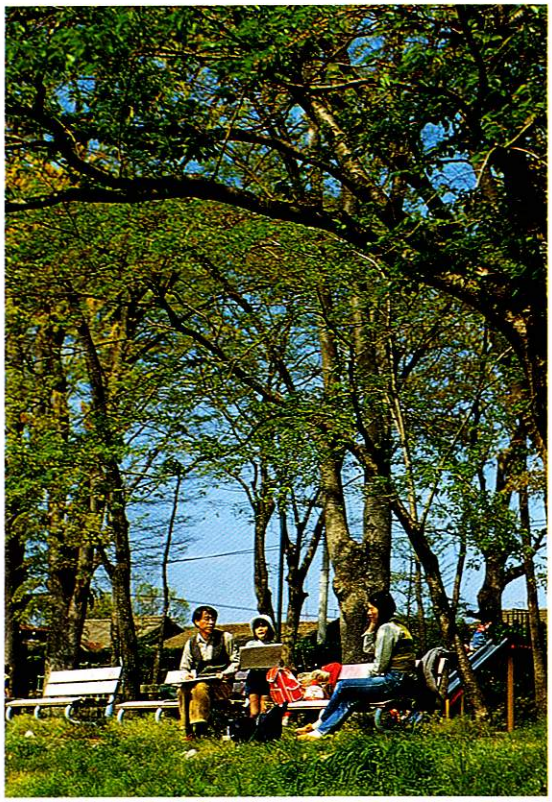
この10年間は、いわば“自己中心的世代”が支配的だったといわれますが、しかし、80年代は、「自分は他人に何をしてあげられるか」という、人と人との“ヨコへのつながり”が重視される時代とみられています。

新しい地域社会の形成は、いま、この若い世代によってたしかに受け継がれているのではないでしょうか。

流動から定着へ

日本人の住宅保有別の世帯割合は、持ち家59.2％、借家40.9％（51年度）ですが、市では持ち家30.8％、借家66.8％（50年）。このように、日本全体に比べて持ち家率は低く、借家率が高いというのが、本市の現状です。

しかし、武蔵野台、多摩河原、加美平の各地区で区画整理が終わり、新しく転入してきた住民もすっかり本市にとけこみ、市民意識も高く、住民同士の連帯感にもとづくコミュニティの幕明けが進んでいます。



そこで、市はさらに良好な住環境をととのえることはもちろん、住宅施設の整備をはかるため、市営住宅の建て替えをおし進めています。今年度完成する市営住宅は、鉄筋コンクリート構造三階建て４棟72戸（３ＤＫ）の規模に建て替えられます。

また、市内には市営住宅(127戸)のほかに、都営住宅や都住宅供給公社、日本住宅公団などの住宅団地があります。